

治療中に父とお母さん、そしておばあちや	しょう。	「まだ着かないのか」何度そう思ったことで	車の中では時間がすごく長く感じました。	す。病院まで歩いていける距離なのに、救急	救急車の中でも祖父は苦しそうにしていま	祖父の症状を伝えることができました。	ました。消防署の人に落ち着いて住所と名前	は祖父とぼくの二人だけです。救急車を呼び	かけても苦しそうにしているだけです。家に	えていました。「だいじょうぶなの」と声を	ません。台所では祖父が苦しそうに胸を押さ	「もう焼けたの」と声をかけても返事があり	やるからな」と、台所に行きました。	に見せると「甘くておいしいから、今焼いて	たもいできたばかりのトウモロコシをぼく	畑仕事に出かけていた祖父が帰ってきました	夏休みに祖父の家に行った日のことです。	○ ○ 中学三年一組 ● ● ● ●	税金が助けた一つの命
---------------------	------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	--------------------	------------

んが慌てて病院にやってきました。近所の人
 が知らせてくれたということでした。祖父の
 病気は心筋梗塞でした。お医者さんは「処置
 が早かったから大事に至らなかった」と言い
 ました。
 「村の病院にもカテーテルが入ったんだね」と
 父が言いました。「カテーテルって何」と
 聞くと、「血管を広げる機械で、心臓にたま
 った血の塊を取り除いてくれるんだ」と教え
 てくれました。
 「去年までこの村の病院にはカテーテルがな
 かったんだ。でも、四月に県立の総合病院が
 できたときに入ったんだろね。それまでは
 重い病気はとなりの市にある大きな病院に行
 かなければならなかったんだ。救急車でも三
 十分くらいかかると思うよ。もし、村に病院
 ができていかなかったら、おじいちゃんは助か
 らなかったかもしれないね」と父は言うど、
 祖父のいる病室に入っていききました。
 家に帰ってから父はこの病院のことをいろ

いろ話してくれました。祖父が住んでいるよ
 うな農村は人口が少ないから設備の整って
 る民間の病院がないこと、高齢者が多いので
 これからは心臓や脳の病気の人が多くなるこ
 と一つ一つ説明をしてくれました。
 父は「田舎だから少しくらい不便なのは仕
 方がないよ。でも、設備の整った病院がなく
 て人の命が失われるようなことがあってはな
 らないんだ。だから県がここに病院を作っ
 てくれたんだ」そうも話してくれました。
 「高齢者社会の到来で、社会保険費が増え、
 これから税金が高くなると新聞で報道される
 のを目にする」と『やれやれ』と感じたが、祖
 父が助かったのも、税金で作られた病院が近
 くにできたからと思うと、納税について考え
 直さないといけないな」と父は言いました。
 今度の祖父の入院をきっかけに、ぼくも税
 金について考えてみました。
 もし、みんなが「税金を払うのをいやだ」
 「もっと税金を安くしてほしい」と言ったら、

祖父が治療を受けた県立の病院はできなかつたでしょう。遠くの病院に運ばれる間に、最悪の事態になっていたかもしれませぬ。病院ができる前に祖父と同じ病気になる間に亡くには、大きな病院に運ばれるまでの間に亡くなつた人もいるかもしれませぬ。

みんなからお金を少しずつ集めて、この病院はできました。一人一人の力が合わさって、一人の命を救いました。ぼくの父や母が納めた税金から作られた病院で、知らないだれかの命が助けられているかもしれませぬ。会つたこともない人たちが一緒になつて社会を支え合う仕組み、それが税金なのだと感じました。

税金についてまだまだ知らないことがたくさんあります。でも、今回のことをきっかけにもつと税金について勉強したいと思ひました。大人になつたら、みんなが助け合う社会の一員としてきちんとして税金を納める人間にならうと思ひます。